乳娼
女女
精
成人向

乳精
娼姦

乳精猖獗

ひぁあああああ

ぶるん

ぷるん

も もおやめてくださ――ひゥッ!?

ったく強情なエルフだぜさっさと認めれば楽になれるのにょォ

ぶる

で……ですから

ぶる

私は異教徒なんかじゃ

こんなスケベなカラダのエルフが……

真っ当なワケがなかろうが!

はひいッ

だっ射精すぞ！

ジュプッ

ジュプッ

いやあああっ

ビクッ

ビクッ

クックッ　どうだ？
そろそろ自分が異教徒と
認めるか？

ビクッ

ハァ……ハァ……
ど　どうしてこんな
するんですか……っ

わ　私……私は確かに
ハーフエルフです　けど
本当に異教徒なんかじゃ……

どうか陛下にっ

女王陛下(アンリエッタ様)に確認を――

わかってねぇなぁ

まぁいいか知ったところで意味もねぇし

にしてもエルフってのは強情だねぇ

さっさと認めてりゃこんなモン使われずに済んだのにヨ

キュポッ

ブル

ブル

な なんですか……ソレ……？やっやめ――ッ

いやぁアッンぶぅウッ!?

ぷふぅっ

ふぐぅぅ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

はぁ

はぁ

ドロッ

い いったい何を……

——ヒッ!?
いはぁあああああッッ

へぇ　もう効いてきたか
……いつもより早いけど
エルフだからか？
まぁ気にしねぇけども

な……なに
コレ？
身体……熱い

ち　乳首が
ジンジンして……

うぉっ　もう完全に
出来上がってやがる！

カラダ……
言うコトをきかにゃひうう
あううう
お おかひっ
ハア
うう！
はぁ♡
ガク
ガク
ガク
ブル ブル

こいつぁ……
ちょいと効きすぎだな
流石にヤバい気が……
まさかエルフ相手にだと
こんなに効果があるとはなぁ
脳味噌バーになっち
まうんじゃねぇか？
あっ♡
くひぅッ♡
……まぁこれも命令だしな
壊れたら壊れたでいいさ
それよりも精々愉しませて
もらうとしようぜ
ブル
ぱん
ぱん
ぱん

ふぁあっ♥
しっかしホントデケェな……
ひゃん♥
もぉ もぉ これ以上はホントに
らっ らめぇ♡
ほいじゃあそろそろナマで拝ませてもらうぜ……っとぉ！
おぉぉぉぉぉぉデケェえええッ!!
やぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ

こんな武器を隠してやがるたぁ

エルフってのはおっかないねぇ

まったくな

ぷるるんっ

では早速ご賞味をば

ひゃうううう

やっ　嫌だ　こんな……こんなの嫌なはずッ……なのに

あっ♡

ひうううッ

ふぁあンッ♡

おっ俺にも揉ませろよ！

モッチリモチモチとまるで手に吸い付いてくるようだぜ！

おほぉおっ！

……クスリ　そう　きっとコレはさっきの薬のせいでだから……

ビクッ
ビクッ
ビクッ
アアンッ♡
ムニュ
ムニュ
おいおい
口では嫌々言いながら
もうすっかり感じてる
じゃねぇか
ブル
ブル
ブル
ひいンッ♡

薬のせいとは言え
乳だけでこんなに感じるたぁ
エルフってのはとんでもなく
エロい変態種族みてぇだな
ハア
ハア
アンッ♡

ったく
とんだ牝牛だぜ
キュッ
んヒィイイッ♥

ふふ
ふふ
ひゃあっ!?
キュッ
クリッ
へへ
どこまで
伸びるかな
っと
はアンッ

もうすっかり蕩けてきたなぁ
異教徒だって認める気になったか？
認めたなっ!?じゃあくれてやる！
欲しいだろ？コイツがよぉ
ダメ……私
これ以上我慢してたら……もう
オカシク……なって……
は……はい そう ですぅ 私 異教と――
ひいいンッッ♥
胸つ 胸にい 熱いのが――んはあああアッ♥

アッ♥
へへ　がっつきやがって
そう焦らなくても
ちゃんと俺のも
くれてやっから……よ！
はぁ♥
どう……して？
こんなの　ダメ
……なのにぃ
スリスリ
ンあ……はぁあぁッ♥
おチンポお……きたぁ♥
ムギュ
ムニュ
ニュプ
ふぁあぁあぁっ♡
胸に挟んでるだけなのにぃ
おチンポキモチイイのおっ♥
ズニュ
ひぅ♥
こ　こいつ　自分から
そんな強く……ッ
ムニュッ
ンッ♥
ふはぁ♥
ズリュッ
ズッ
うおッ!?
ンぷっ♥
はむ♥
チュプ
ヂュルルッ
こっ今度は舌で……
おぅうぁあぁあッ

えひゃあ♥

ちくびイイッ♥
おチンポと擦れて
感じひゃいまふう♥

カラダ……熱い
これ以上は
……もう――

ったく自分ばっか
愉しんでんじゃ
ねぇぞコラッ！

ひうウッ♥

んぁあ♥

うぉおお！

オラッ！
こっちもしゃぶれ

チンポぉ♥

こいつぁすぐにでも
射精ちまいそうだぜッ！

おっくほぉぉ
イィイクぞぉぉ！

ぷるっ

ぷるんっ

んんッ

ヒッ　ああ♡

ふるふる

ンひいあああ
ああああああッ♥

ズッ

ビクン

うぐッ!!

ズリ

ズリ

はぁ
はぁ
はぁ
プルン
ひゃあンッ!?
おいっ　休んでる暇なんざねぇぞっ!?
みっ耳はりゃめええっ!? 感じしゅぎ……ひゃふう♡
じゃあ今度は……ほれ　力抜けよ
そっソコ――
フンッ!
ヒッ!?
ヒイイイッッ!? おひいいいっ おひり入っへくりゅう♥
ビクッ
ビクン

おおっ!? コイツのケツ
グイグイと……ふぉ～～
締めつけてきやがるぜぇ

嬉しそうに
自分から腰振りやがって
もうすっかり
チンポ漬けだなっ！

ンぶふぅ♡

はぁむ♥

ひぐぅッ♥

よぉ～し 前にもまた
喰らわしてやるぜぇ！
オラッ どうだっ!?

んひいいいッ!?

チンポぉ♥

あっ♥

ヒィ

なっ ナカで
擦れて……
ひゃぐぅウッ♡

ヒグッ
わっわらひ——

イヒィイイ
イッひゃいま
ふうううッッ♥

グォオオッ
だっ　射精すぞぉおっ

みやひいいいッ♡

はぁ♥

ひうっ♥

ああ……私　もぉ
キモチ　良すぎて
異教徒でも……いい
……はぁ♥　ンッ♥

はあっ♥

ひぁあアンッ
チンポお♥

どうですか？
ねぇ　サイト殿

テ……テファ？

ンはぁッ♥

イイッ♥
チンポもっとお♥

わたくしも残念ですが……
やはり彼女は怖ろしいエルフ
……異教の徒だったようです

おチンポお♥

アヒィッ♥

ですからサイト殿も
努々騙されたりはしないよ
お気をつけてくださいね？
クスクス

乳精婦奴

～◆～

或いは――彼がもっと不誠実な男性であったなら、自分は救われていたのだろうか。

とりとめもなくくだらない事を考えながら、アンリエッタは陰鬱な溜息を吐いた。女王たる者このような事ではいけないと思いつつも、深夜、私室で一人になってしまえば溜息が途絶えることはない。それどころか即位してからこちら、増える一方だ。

自信過剰ということもなく、極めて客観的に判断して自分はこの一年で随分と政治が巧くなったよう思える。何も知らなかった小娘の頃と比べ、ようやく女王という立場に見合うだけの能力がついてきたという自信は、あった。

しかし王としての能力が向上するにつれ、比例して溜息の量も増えていく。夜ごと募る想いは膨れ上がる一方で、その点に関しては自己の管理制御などお世辞にも出来ているとは言えない状態にあった。

恨めしさと愛おしさが、赤黒く渦巻いている。

清純な乙女の想いとはまるで異なるそれは、禁断の果実どころかドロドロに溶けた溶鉱炉の鉄のように熱く重く、灼熱としながら身も心も焼き続けている。

己の女としての業の深さについては、アンリエッタは充分に理解しているつもりでいた。

親友を裏切り、従姉妹を辱め、数多の人間を欺きながら、それでもたった一つの想いを止められないでいる。決して長いとは言えない自分の生涯の中で二度目の恋。二度目だからこそ深く、狂おしいのかも知れない。

「……サイト殿……サイトぉ」

一国の女王からの求愛にも応えようとしてくれない、平民出の男。いや、出自など関係ないのかも知れない。おそらく生まれが貴族であったとしても、才人はどこまでも才人だったろう。そして才人だからこそ、自分は報われずに苦しんでいる。

「……――～～～ッ！」

不意に込み上げてきた真っ黒な激情に突き動かされて、アンリエッタはテーブルの上にあった水差しを壁に向かって投げつけていた。

ガラスの砕け散る音が、室内に響く。

情緒不安定もいいところだ。恋煩う女の全てがいっそこうならまだ良かったろうに、自分のこれは明らかにいき過ぎている。だからこそ、アンリエッタは水差しの破片が床でカラカラと周りながらたてる音に耳を塞いだ。

しかしそれでいて、己の行動の全てを計算高く見つめている、怜悧な部分も確かに存在している。

「陛下っ、何事ですか!?」

アニエスがすぐさま部屋に飛び込んでくることも、織り込み済みだ。彼女の忠義はあまりにも大きく、尊く、無骨者のようでありながら自分よりもよっぽど無垢な少女のようで……だからこそ疎ましく感じることもある。アンリエッタという女の醜さが浮き彫りにされるかのようで、辛いのだ。

その辛さを僅かにでも解消するために、アンリエッタは彼女（アニエス）を試す。主君としては、およそ最低の部類だろう。

「……いいえ、何でもありませんわ、アニエス。心配は無用です」
そう言ってニッコリと微笑みかける様はまるで顔の無い怪物のようだとアンリエッタは胸中で自嘲した。
王など怪物も同然だ。
孤独で、貪欲で、傲慢で、我儘で、醜悪で、おぞましい。
……そうやって、全てが女王という立場のせいだと開き直ることが出来ればまだマシだったろうに、それすら出来ない半端者がアンリエッタ・ド・トリステインという哀れで卑小な女なのだ。
「……すぐに侍女を呼んで片付けさせます」
床に飛び散った破片を見つめ、アニエスは哀しげに呟いた。その忠実に主を慮ろうとする様はなんとも健気だった。あまりにも健気すぎて、ぶち壊したくなってくる。
「アニエス」
鈴の音が鳴っているかのような優しい声色で、アンリエッタは忠臣の名を呼んだ。侍女を呼ぶために退室しようとしていた彼女の肩がピクリと震える。
「侍女を呼ぶ必要はありません」
顔の無い怪物の艶やかな唇が、三日月のように曲がった。
アニエスの悲哀がどこにあるのかなどとうに理解しているが故の悪辣な微笑だ。
そして、主は己が腹心に命じる。
「替わりに、彼らを呼んでください」
「陛下、彼らのことはもう――」
「アニエス」
有無を言わさぬ、王の迫力が、重みが、アンリエッタの言葉には含まれていた。逆らえるはずなど無い。恩義も忠義も、それらは復讐という望みを捨て去ったアニエスにとって今や生きる道標にも等しいのだ。
「もう一度、言わなければいけませんの？」
クスクスと、童女のように笑う主をアニエスは顧みることが出来なかった。大切な人が壊れていくのをこれ以上見たくなかったのかも知れない。
「……承知、致しました」
最後まで振り返ることなく、アニエスは女王の私室を辞した。

■■■

アンリエッタのその悪い病気が発病したのは、かれこれ数ヶ月前まで遡る。
その日、彼女はいまだ先の戦争の爪痕残る市街を銃士隊に警護されながら視察していた。あくまでお忍びに、爵位の低い貴族を装ってのものだったが、そのようにして城下を見回りつつも、彼女の胸のうちには国民の安寧を願う心と同時に、かねてより抱き続けていたある男への懸想――親友の想い人でもある、平賀才人への切なる想いが渦巻いていた。
吐息が前髪を揺らすたびに、このようなことではいけない、無私無欲の、アンリエッタという個人ではなくあくまでトリステインの女王として振る舞わなければならないと思えば思う程に、軋轢が生じていくのだ。
「……サイト殿」

名を呟くだけで、身体が火照る。
女王という激務の中、己をどんなに押し殺そうとしても殺しきれない呪わしいまでの恋心。もし彼が受け入れてくれたなら、この恋が成就することがあったなら自分はトリステインの歴史上最良にして最優の国王にだってなれる自信があるのに……彼の目には、主であるルイズの姿しか映っていない。
全てを投げ打ってでも、彼を奪いたいと思う瞬間がある。政務の狭間に、湯浴みの最中に、寝所に横たわった際に、脳裏に浮かぶ才人の笑顔が眩しすぎて……アンリエッタは泣き叫びたい衝動と必死に戦っていた。
今だってそうだ。
目を閉じればすぐに才人の顔が瞼の裏に浮かんでくる。いや、閉じるまでもなく目の前には才人が――
「……え？」
一瞬、アンリエッタは我が目を疑った。
「サイト殿？」
馬車籠の窓の向こう、路地裏に消えていく才人の後ろ姿を見た気がしたのだ。
「どうして……何故？」
どうしても何故もない。別に才人がトリステインの街を出歩いていたところで特におかしな事ではないのだ。ただ、今のアンリエッタにとってはそれはとても不思議な――ある種の奇跡のようにも感じられた。
自分が願い、思い浮かべたことで愛しい男性が現れた……そんな錯覚をすら、抱いてしまう。
「あっ、アニエス！」
「？　どうかなさいましたか？」
御者を務めていたアニエスにすぐ止まるよう指示を出し、アンリエッタはフード付きのマントを被ると部下の制止も聞かずに馬車を降りた。
「陛下、どうなされたのですか、陛下ッ!?」
アニエスと銃士隊が突如走り出したアンリエッタの後を追う。
女王は止まらなかった。先程才人が消えたはずの路地を曲がり、想い人の姿を探し求める。まだ時間はそんなに経っていない、すぐ近くにいるはずだと自身に言い聞かせて――
「あっ」
見つけた。
「サイト殿！」
のんびりと歩いている才人の姿を。隣にルイズはいない。タバサもティファニアも、他の誰も彼の隣にはいない。その事が、まるで才人が自分に逢うために来てくれたかのようにこの時のアンリエッタには感じられたのだ。
「サイト殿っ」
彼の肩に手を伸ばし、振り向かせるという単純な行為が、そのままルイズから自分へと振り向かせるのと同義なのだと言いたげにアンリエッタの胸は弾んでいた。
しかし、そんな希望はすぐさま砕け散ることになった。
「？　あの……お姉さんは、どなた様ですか？」
振り向いた少年は、才人ではなかった。見れば髪も才人のような黒髪ではなく、やや色が濃くはあっても茶髪だ。
背格好はそっくりだったものの、年齢は幾らか下に見える。それは才人本人がハルケギニアの人間と比べ実年齢よりも下に見ら

れることが理由でもあったが、アンリエッタはまるで天国から一気に地獄へ突き落とされたかのような絶望を味わわされていた。
「……人……違い……なんて……そんな」
「お姉さん？」
心配そうに覗き込んでくる少年の容貌は、本当に才人に似ていた。もし才人がこのように側でいつも自分の身を案じていてくれたならと思うと、余計に胸が締めつけられる。
すぐ側に、いて欲しい。
いつも近くで声を聞かせて欲しい。手を触れ、口付けを交わし、この身をきつく抱いて欲しい。
叶わぬ願いが、アンリエッタの頬に涙を伝わせた。
「あ……あの……」
女王が真実狂ったのは、まさにこの瞬間からだったのかも知れない。目の前の才人の面影を求めるあまりに、彼女は名も知らぬ平民の少年を抱き締めていた。
「わ、わわわぁあっ!?」
「サイト殿……サイト、サイトぉっ！」
駆けつけてきたアニエスと部下達が見たのは、混乱している少年を捕らえ口付けながら、決して放そうとしない女王の姿だった。

■■■

コンコン、と。
ノックの音が木霊する。

「……はい。どうぞ」
蠱惑的なアンリエッタの声に、「失礼します」という声が複数。
扉が開き、同じような背格好の少年達が現れる。
「よく来てくださいました」
目鼻立ちも似ているなら、髪型も同じ。さらにトリステインでは非常に珍しい鴉羽のような黒髪は、全員が染めているからだ。
他でもない、この国の女王の命令で。
「さぁ、遠慮せずこちらへいらっしゃい？」
「……はい」
アンリエッタはベッドに腰掛けていた。その仕草は優雅で、慎ましく、美麗で……なのに、どうしようもなく妖艶で、淫靡な空気を全身に纏っていた。少年達が、思わず生唾を呑む。
「クスクス」
青々しい欲望の発露はいつ見ても心地がよいものだ。彼らの反応に悦びつつ、アンリエッタはゆったりとした動作で手招きをした。途端、才人によく似た少年達は銘々衣服を脱ぎ出し、生まれたままの姿をさらけ出していく。
「まぁ……もうそんなにオチンチンを大きくして。イヤらしいですわね、サイト殿は」
少年達の中には、言うまでもなく〝サイト〟などという名前の者は一人もいない。シエスタのように異世界の血を引いているわけでもなく、皆生粋のハルケギニア、トリステイン人だ。
けれど、アンリエッタにとってはどうでもいい事だった。些末事だ。重要なのは彼らが才人に似ていること、そして自分が才人と呼びかければ返事をしてくれることなのだ。
「はい、すみませんアンリエッタ様」

女王とも陛下ともつけさせない。本音を言えば呼び捨てにさせたくすらあるのだが、そこまでは彼らも畏れ多いのか命じても震えるのみだった。

「僕……いえ、俺は、アンリエッタ様の事を考えるだけで欲情してしまう、情けない犬です」

「そのようなこと、仰らないで。サイト殿は情けなくなどありません。素敵な騎士様です」

とんだ茶番だ。しかしこの茶番こそが、今のアンリエッタに唯一精神の安定をもたらせてくれる妙薬だった。

女王としての重責と、叶わぬ恋への懊悩。その二つによって押し潰されそうになっていたアンリエッタが漸く手に入れた、ガラス細工の安寧なのだ。

「ああ、ああ……サイト殿、お早く。後生ですから……」

斯様な三文芝居を、演じさせるのも、演じるのも、無論全てに満足しているわけではない。アンリエッタには正常な思考能力はしっかりと残されている。それでも、むしろ正常であるからこそ狂気に惹かれるのかも知れなかった。

狂気に落ち込んでも、それでも愛を得たかったのだろうか。

「……はぁ、んっ……♥」

ベッドの周りを何人もの才人が並んで埋め尽くしていく。その全てが素肌を晒し、股間には隆々たる勃起した肉棒がそびえていた。そんな騎士の剣を、女王は所望する。

「サイト殿……恥ずかしがらずに、わたくしに全てお任せくださいませ……クス、クス」

官能に弛みきりながらも、アンリエッタの眼は獲物を狙う猛禽か、雌豹もかくやといったものだった。ゆっくりと、視線と舌なめずりだけで少年(サイト)達を惑わし、昂ぶらせて、まだ触れない。

早く、と誘いつつも、動かないし動かさせない。

「さぁ、もっとよく見せてくださいまし。可愛らしい包茎おチンポをわたくしに……」

早く触れたいというのは本心なのだ。

まだ皮も満足に剥けていない幼い子供のペニスに直接触れ、持てる性技の全てでもっていたぶり、責め抜きたい。彼らの無垢な喘ぎを想像しただけでアンリエッタは蕩けそうになってしまう。

けれどもその欲求に耐え、女王はまず少年達を視線と言葉で犯した。入念な下拵えこそが、これから先の快感をより高めてくれるのだとでも言いたげに。

「う、あぁぁ……アンリエッタ様ぁ」

「うぐっ、くぅ……ッ！」

言うまでもないことだが、彼らには自分達の手で触れ、慰めることも許してはいない。どんなに辛くとも、たとえ気が狂いそうになろうとも彼らはアンリエッタの許しがなければ何一つ自ら行動することは出来ないのだ。

支配者の愉悦がアンリエッタの全身を駆け巡っていた。

少年(サイト)達の浮かべる苦悶の表情。解き放ちたいのに解き放てず、ビクビクと震えている肉棒を眺めているだけで絶頂を迎えそうになってしまう。

今、才人は自分しか見ていないのだ。

ルイズでもティファニアでもタバサでもなく、ただただ一人だけ、アンリエッタ・ド・トリステインだけを見て欲情してくれているのだ。

「ふぁぁぁぁっ♥」

腹の奥がキュンと疼いた。
心も身体も、全てが才人を欲している。才人に欲されている。
「ああ……サイト殿……そんなに熱く脈打たせて」
濡れた瞳に映る肉棒の、浮き出た血管の一つ一つでさえもが愛おしくてアンリエッタはうっとりと指を伸ばした。
触れたい。どうしようもなく、直接触れて、感じたい。
才人の脈動を、才人の熱を、才人の快感を……己が身に伝えたくてたまらないのだ。
「フ、フ……今にも、破裂しそうですわ。苦しそうに、けれどキモチ良さそうに……こんなに腫らして」
「……あっ」
アンリエッタの伸ばした右手人差し指が陰茎に触れそうになった瞬間、その持ち主である少年の目に期待の色が浮かんだ。が、それを確認しただけで女王は指を引っ込め、勿体ぶった仕草で口元へと運んでいた。
「んっ……ちゅっ、ぬぷ……ちゅる、ぺロッ……♥」
口内に溢れかえっていた唾液をたっぷりと指にまぶし、唇から指へと繋がるアーチを空中に作ったアンリエッタは極悪なまでの上目遣いで少年を見上げた。
誘っている。
明らかに誘っているのに、少年からは手を出せない。彼らは皆、アンリエッタが望む通りの才人を演じ続けなければならない、いわば木偶やゴーレムも同然なのだ。
そう――彼らは、アンリエッタの使い魔だった。
彼女の中の虚ろを満たす、ただそれだけのために使役される使い魔。肉奴隷と言い換えてもいいかも知れない。

「あぐぅ、……う、ぐぁああ……ア、アンリエッタ、様ぁ」
自らの意思では何も出来ない哀れな肉人形の呻きにようやく満足感を得たのか、アンリエッタは「仕方ありませんね」とでも言いたげに今度こそ指先で少年の亀頭に触れた。
「ひぁあっ！」
「まぁ、ただ触っただけですのにそんなに大きく震えて……わたくし驚いてしまいましたわ」
などと言いつつ、もう片方の手も別の少年の肉竿……その根本へと伸ばす。
「あっ、あぁあああっ!?」
魂切るような悲鳴をあげて、少年は大きく仰け反っていた。
「こちらも……そんな悲鳴をあげては、アニエスあたりが驚いて飛んできてしまうかも知れませんわよ？」
根本からゆっくりと、指先が陰茎を擦り上げていく。
その動きに激しさはない。ただ触れて、ただ上へ上へと動かしているだけだ。それなのに、限界寸前だった少年には地獄の責め苦も同然だった。
「イきたいのですか、サイト殿？　こんな、触れられただけなのにおチンポをビクンビクン震わせて……まるで池で飼われているお魚のようですわ」
「はぁ……あ、ぐぅ」
「……でも、まだダメです」
言うなり、アンリエッタは手の平を返すと少年の肉棒をギュッと根本から握り締めた。
「あぎぃいいいっ!?」
「まだ、まだいけませんわ、サイト殿。まだ始まったばかりなの

ですのに、こんなに容易く射精されてしまっては勿体ないですもの。もっともっと、一緒に愉しみましょう？」

身をくねらせる少年に無慈悲な言葉を投げかけて、握り締めた手を上下させながらアンリエッタは狂気に貌を歪めた。

自分は酷いことをしている。残忍で、非情で、冷酷で、一国を統べる女王にあるまじき言動を繰り返している。それは満たされないからだ。

「はぁ……はぅ、あぁあっ♥」

カラダとココロにポッカリと空いた虚ろ。がらんどうのそこが餓鬼のように求めている。自らの飢えを、渇きを満たすために、空虚な己を補うために。

それを愛と呼ぶのなら、愛とはやはり身勝手なものなのだろう。

事実、自分は極まって身勝手だ。人格者を装いながら、およそ己の欲求に対し自制が効かない。

才人が欲しい。

ただそれだけの望みのために、このような恥知らずな真似に及んでいる。狂いかけの理性が自身をどれだけ糾弾しても、無意味だった。

「んっ……ですが、サイト殿が……イケナイのですよ？　……わたくしが、こんなにもお慕い申し上げているというのに」

かつての恋は、ロマンスだった。

従兄でもあった、アルビオン王国のウェールズ皇太子との恋はとても穏やかで、凪いだ海のような恋だった。その結末こそ哀しく凄惨なものではあったけれど、少なくとも彼を想い想われている間は憂い無く幸福であれたのだ。

なのに今の恋は、辛く苦しいだけだった。

アンリエッタにとっては初めての、横恋慕。相手が自分を一番に見てくれないのに、こちらからは一方的に深い愛を注がなければならない、注がずにはいられない……それが、平賀才人への恋心だった。

一国の女王をして何一つ思い通りにならないそれは拷問のようで、それなのに才人の顔を見て、声を聞くだけで僅かな幸せを感じることが出来るのだ。

憎かった。

親友であるはずのルイズが。従妹であるはずのティファニアが。ガリアの女王であるタバサが。

彼に想いを寄せる全ての女達が憎く、妬ましく、だからどこまでも残忍になれた。

……それ、なのに。

「貴方は……決して応えてくださらないの。……わたくしの、この想いに……ええ、わかっております。叶わぬ恋であるのだと、わかっているのに……だからこそ、辛いのです」

「ぎぅ、い、いいいい、あぁあああっ」

肉棒を扱く手にさらなる力が込められ、少年は身を捩った。さらにもう一本、最初に指で触れた肉棒も握り締め、細くしなやかな指に似つかわしくない、力強い動きで翻弄する。

「ア、アンリエッタ様……あぁあっ」

「こんな、こんなの……ひぐぅうっ!?」

苦しげに悶える少年達の喘ぎが、才人の声となって全身に染み渡っていく。

これは罰なのだ。

自分の想いに応えてくれない才人への。

報われない想いに対し、せめてこのくらいはいいではないかというあまりに稚拙で自分勝手な、アンリエッタの凶行が少年達の肉棒を弄び、自分と同様に狂わせようとする。
「ではそろそろ……んっ、はふ、ぁ♥　……この、皮を剥いてさしあげますわ、サイト殿……ぉ」
とろんと目尻の下がった眼差しで、アンリエッタは息も荒く皮と亀頭との間に指を滑り込ませた。
「んぁああっ!?」
裏筋の辺りに入り込んだ人差し指の、爪がカリッと敏感な粘膜部分を引っ掻く。傷をつけるようなものではないとは言え、少年はむず痒さに思わず腰を引いた。
「あら、ダメですわサイト殿。おチンポの皮はもっとしっかり剥きませんと……ンッ」
「ひゃぁあいいいいっ!?」
今度こそは痛みだった。あろう事か、アンリエッタは少年の皮を摘んで自分の方へと引っ張っていたのだ。
「ンフフ……これでは伸びてしまいますわね♥」
「アンリエッタ、様……も、もぉ、やめ……――ぎぅう!?」
皮を引っ張られて腰を戻したところを、今度は反対に剥かれて少年は歯をカチ鳴らした。そのままアンリエッタは皮を少しだけ剥いては戻し、剥いては戻し、ヌッチュヌッチュと先走りによる淫音を響かせながら愉快でたまらないといった風に少年の肉棒を蹂躙した。
「あっ、あがっ、ひぎイイッ！」
「ふぅ……ふぅ……ああ、サイト殿、匂ってまいりましたわよ？こうして擦っていると、ああ、汚らしい垢がどんどん出てきて……おチンポの匂いが……んふぅ、はぁああ♥　なんて、イヤらしい匂いなのでしょう。饐えた匂い……白っぽい見た目も、匂いも、チーズみたいですわ……たっぷりの、おチンポカス♥　……ンッ、はぁ……スンッ、スンッ……あぁ……んふ、……えいっ♥」
息遣いも荒く倒錯とした表情で、アンリエッタは唐突に勢いよく右手で扱いていた少年の皮を完全にズリ下ろした。
「ぎひゃぁああっ!?」
敏感な部分が剥き出しになる。粘膜に貼り付いていた部分が急激に引き剥がされた感触に少年は眼を見開いた。見開いた眼の奥で火花が散っていたよう見えたのは、おそらく錯覚ではない。
痛みとも快感ともつかない、理解の許容量を超えた感覚に脳がオーバーヒートしているのだ。
「フフ……サイト殿、こぉんなにご立派な剣を、鞘の中に隠してらっしゃったのですね？」
「ああ、うぅああ……～～～ッ」
外気に触れたピンク色の亀頭は小動物のようにプルプルと震え、アンリエッタを愉しませた。
「ああ、本当にこの剣の素晴らしさと言ったら……やはり、サイト殿は騎士様であらせられますわ。このトリステインでも随一の、護国の聖騎士様……はぁっ♥」
熱と脈動、臭気を心ゆくまで味わいながら、アンリエッタは今度は少年の陰嚢を優しくさすり始めた。
「アンリエッタ様、そ、そこは……っ」
肉棒以上に敏感且つ男子にとって絶対の急所を女王の手でまさぐられ、少年は恐怖に頬を引き攣らせた。もし今この瞬間にでもアンリエッタが凶暴な衝動に取り憑かれたならと思うと気が気で

ない。
が、それはどうやら杞憂のようだった。
「クスッ♥　剣だけでなく、この宝珠も……愛おしいですわ、サイト殿……んふぅ」
揉みほぐす手には確かな愛情を感じる。ホッと胸を撫で下ろした少年を見上げ、アンリエッタは満足げに陰嚢から手を放すと再びもう一本、先程まで弄くっていた肉棒へと手を伸ばした。
「ああ、ごめんなさいねサイト殿。放ったらかしにしておいたわけではないのです。ですけれど……ああ、どうかわかってくださいまし」
さめざめと謝罪の意を述べつつ、アンリエッタはその肉棒にも、皮と亀頭の間に指を入れたり、尿道口を爪の先で軽くほじったりしながら、ついには皮をズル剥けにした。
「うひぃいいうっ」
「ああ、こちらの剣も見事な業物……さぞ名のある聖剣なのでありましょうね、このチンポ剣は……♥」
その状態でなおも裏筋や亀頭を指の腹で擦り、どんどん恥垢まみれになっていく少年達の肉棒を見つめて眼を潤ませる。
「あはっ♥　すごぉい、ですわぁ……皮をかむっていたせいなのかしら。こんなにカスが……クスクス。お恥ずかしいのですか、サイト殿？　女王の指でおチンポ弄くり回されて、こ～んなにおチンカスまみれにされて、お恥ずかしいのですか？」
「ああ、うぅうう」
「ンく！　ひや、あぁあ」
何と答えていいのかわからず、少年達は表情を歪ませながら尻に力を込め、モゾモゾと太股を擦り合わせた。今にも射精しそうなのに、アンリエッタは精液が竿の中を昇ろうとするのを察知すると途端に根本を強く握って絶頂を阻止しようとしてくる。そのため彼らはイクにイけないイき地獄を味わわされていた。
「射精、したいのですね？　わたくしの手で、指で、おチンポの皮を剥かれながら扱かれてドピュドピュとザーメンを吐き出したいのですね？　……あぁ、サイト殿ぉ♥」
一度狂いだした理性の崩壊はとどまるところを知らなかった。頭の片隅に残っていた〝目の前にいる少年達は才人本人ではない〟という認識さえ薄れ、消えかけている。
禍々しい狂女の笑みを浮かべ、アンリエッタは二人の才人の肉棒にトドメを刺すべく扱く速度を上げた。
「アンリエッタ様ッ、も、もぉ……うぅッ！」
「イ、イきますッ！」
今回は根本を握り締めたりはしない。アンリエッタは笑みを浮かべたままの口を開け、赤い舌を蛇のように覗かせた。
「ああ、どうぞイッてくださいまし……サイト殿のおチンポミルクを、わたくしにタップリと飲ませてぇ♥　顔にも髪にもいっぱいブチ撒けてくださいっ♥」
「くぅ、あぁああっ！」
「イクッ！」
尿道を大量の精液が昇っていく感触を指で直接感じながら、アンリエッタは溜まりに溜まった精液が噴き出す瞬間を待った。
才人達の絶頂する顔を見つめながら、才人達の精液を浴び、才人達の精液の匂いを嗅ぎ、才人達の精液を飲み干す……その快感は至福だ。
アンリエッタの中の雌が疼く。疼いて疼いて、もう止まらない。

トドメを刺されたのは少年達だけでなく、アンリエッタもまた同様だった。
「あっ、あぁあああああサイトぉおおおおおおっ♥」
凄まじい勢いで噴出してくる精液の洗礼を受けながら、アンリエッタも絶頂を迎えていた。
「あっ♥　ああ、は、おぉおおお……♥」
精臭が香り、全身に染み込んでいく。やや黄ばんだ精液は濃厚で、プルプルとダマになっていた。まるでヨーグルトだ。
「んちゅっ、はぁむ♥　……ふぅ、んはぁあっ♥」
口に飛び込んできた分をゆっくりと咀嚼する。舌を使って口内でクチュクチュと弄くり回し、心ゆくまで味わう。
「んふぅ、……むぷぁ♥　うぁ♥　美味ひいですわぁ……サイト殿の、プリップリのおチンポ汁が……歯茎にまで絡みついて、このままでは取れなくなってしまいそうです……ちゅむっ♥　んはぁ♥」
「ああ……アンリエッタ様ぁ」
「いぅ、うぅ……うぉッ」
あれだけ射精したのに、二人の少年の肉棒はまだ雄々しく勃起したまま、さらに精液を断続的に吐き出し続けていた。
「あンッ♥　もぉ、どれだけ射精なされば気が済むのですか♥」
口の中の分をようやく嚥下しつつ、アンリエッタは追加で撒き散らされた精液を勿体なさそうに指で掬い上げ、口へと運んだ。
「んふぅっ、んちゅ、レロ……ぬちゅっ、むぅ……ふぅ♥　こんなに射精なさったのに、サイト殿のおチンポ……まだまだお元気で……ああっ、素晴らしいですわ……ふちゅっ、ペロ……ちゅぴ、ちゅぱっ♥」
口の周りに付着した分を舐め取り、身体に付着した分は手で丹念に肌へと擦り込ませていく。
全身を才人で満たすためだ。
他のどの女達よりも、アンリエッタは才人に近しくあろうと望んでいた。才人と身も心も一つに溶け合いたいという情念の炎は熱く激しく燃え盛り、鎮まる気配は無い。
人生で二度目の恋。女王という立場からはあまりにも険しく、道ならぬ恋であるが故に。
「ああっ、あああっ、才人殿ぉ♥」
勢いよく、引き裂くようにしてドレスを脱ぎ、まろび出させた乳房へと直接精液を塗りたくる。
この国で最も美しく、最も高貴な女性の白桃のような双乳が精液に汚れていく光景は、少年達には恰好の興奮剤となった。
――ああ、なんという淫らな姿なのか。
人ならざる存在、淫魔の女王のようだ――
「クスクス♥　ああ、まだこんなにもたくさん……サイト殿の愛が溢れ出しそうに……」
才人達からの欲望の視線を一身に浴びて、アンリエッタは悦びに咲き乱れた。何とも言えない充足感、欲しくて欲しくてたまらなかった男が自分を取り囲み、自分だけを見つめてくれている。
思えばトリステインの王家に生まれてこの方、アンリエッタは満足というものをした事がなかったのではなかったか。姫として多くの家臣に、貴族に傅かれ、敬われ、あまりにも恵まれていた。
冠を頂いた事や戦争を挑み迎えなければならなかった事はそんな時代を治世した者として不運ではあったものの、それでも着るに食うにあぶれる人々と比べればこのような血生臭い時代にあり

ながらもアンリエッタは充分に満たされていたはずだった。
それでも彼女は手を伸ばす。
開いた口から、舌を伸ばす。
「……はぁ、ん♥」
理由は明白。
足りない。
満たされない。
渇いている。
「サイト殿……サイト……ああっ、サイト、サイトぉ」
呪言のようだった。
事実、アンリエッタにとっては言霊の類であったのかも知れない。彼女にはその名が必要だったのだ。
たった一人の男を手に入れるためだけに、壊れゆく女王は自らの乳房を揉みしだき、丹念に丹念に精液を塗り込んで、さらには大量の唾液を垂らした。
「んはぁっ、んぷっ……むぅ、ちゅぷっ♥」
乳房の表面がテラテラと精液と涎によって照り輝いていた。大きいのに、驚く程に美しく形の整った双丘がイヤらしく湿った様はこの世ならざる淫蕩さを醸し出していた。
「はぁ……あっ♥　サイト……ああ、騎士サイト……わたくしだけの騎士……誰にも、渡さない……っ、渡すものですかっ」
瞳に炎が灯った。
貪るように、アンリエッタは手近にいた少年の肉棒を手繰り寄せたかと思うと、散々にこね回した乳房でもってそれを挟み込み、両側から強烈に圧迫した。
「あああアンリエッタ様ぁあああああッ!?」

不意に股間から走った快感の電流に、少年が涙を流す。零れた涙の雫は彼の頬を伝い、そこからアンリエッタの乳房へと落ちた。
「フフ、……ふぅ、……ふぁあ♥　サイト殿の……サイトのおチンポ、わたくしのオッパイで虐めてさしあげます。しっかりと、こうして挟んで……ふぅンッ♥」
強烈な圧迫ではあったものの、アンリエッタの乳房の信じられない柔らかさによって少年の肉棒が哀れにも押し潰されることだけはなかった。
「ああ、ああ……アンリエッタ様のオッパイが……ぼ、僕のチンチンを挟んで、扱いて……うぁあっ！　や、柔らかい……こ、こんなのスゴすぎて……いぅうっ!?」
才人の代用品としてトリステイン中から集められた少年達はいずれも十代前半から半ば頃。異世界の東洋人である才人はこの世界では実年齢より幼く見られてしまう容姿だったため、彼に似た少年を集める以上年齢的にはそうならざるをえなかったのだ。
集められた当初、彼らの殆どは性経験などまだ無い童貞だった。アンリエッタへの供物として捧げられ、こうして夜伽の相手を命じられるようになってからもなにぶん数が数なため、実際に相手をする数は限られてくるし、やはり経験が豊富というわけではない。いきなりの女王御自らによるパイズリなど、彼にとっては驚天動地の出来事であったのだ。
「サイト……キモチ良いのですか？　そのように上擦った声をあげて、わたくしの胸の中でおチンポをこんなにもビクビクと震わせて……そんなにキモチ良いのですか？　……なら――」
「うはぁあっ!?」
さらに、圧迫。

「こんなのは……いかがです？　……んあぁあっ♥」
自らも快感に悶え啼きながら、アンリエッタは乳圧でもって少年の皮をひん剥いた。
「あ、ああっ」
剥き出しにされた亀頭を、硬く勃起した乳首が擦る。挟み扱きながらアンリエッタは少年を見上げ、今度は裏筋の部分を乳首の先端でコリコリと攻撃した。
「やっ、き、キモチイイですっ、キモチ良いですアンリエッタ様アンリエッタ様ぁあああッ!!」
「ああ、わたくしも……ひゃぅううっ♥　ち、乳首が……は、はぁあああっ、イヤらしく勃起した乳首が、サイト殿のおチンポと擦れて……ふぐっ、く、きゃふぅン♥　キモチ……い、良いッ♥　これ、擦るの、……す、すごくキモチ良いですっ、キモチ良いですサイトおおおっ♥」
胸の間から剥かれたばかりの亀頭が顔を出しツンと饐えた匂いが鼻腔へと侵入してくる。その香りを胸一杯に吸い込んで、アンリエッタは蕩けきった貌を見せると唾液まみれの舌を伸ばした。
「ふぅ、んちゅっ、レロ♥」
「ういいいっ!?　ア、アンリエッタ様ぁっ」
今度は亀頭の先端を唐突に舐められて、あまりの事に少年は大きく腰を捩った。そのせいで胸から肉棒が抜けそうになるも、アンリエッタはそれを許さない。しっかと挟まれた剛直は柔肉の万力によって完全に固定されていた。
「んちゅぅうっ、ひゅむ、じゅぷっ♥　……ん、チュッ、ペロペロ、ふあぁあっ♥　サイト殿のおチンポの味……いつ舐めてもこってりとして、なんて舐めごたえのある……はぁ、チンポぉ♥」
「あ、ああっ、先ッポ……舌でそんなベロベロって……いぅッ、ひぃいいいぃぁッ」
少年の身体が何度も何度ものたうつ。それでも股間だけはアンリエッタによって固定され、肉と肉が擦れ合い、舌が亀頭を舐めしゃぶる淫猥な音が室内に響いた。
「どうです？　ンチュ、れる……ルロォ……チュぷっ、んむぅ、はふぅ♥　……わたくしの、口吻……サイト殿のおチンポクチとこのように熱烈な……あぁっ……なんて、ふしだらなのでしょう、トリステインの女王ともあろう者が……んむぅ、はぁむっ♥」
「じょ、女王様とのキス……なん、てぇ……ひぐっ！　お、畏れ多くて……あぅうあああっ!!」
少年の股間に電流が走った。
そのような言葉を聞きたくはないのです、とばかりにやや拗ねた表情でアンリエッタは亀頭を甘噛みした。痛みの無い、むず痒い感覚が絶妙な物足りなさで少年を責める。
「はむっ、ふむぅ……カプッ……ンッ、ふぅ」
「あっ、ああっアンリエッタ様そそ、そんなぁ」
哀願するような少年の声をしかしアンリエッタは無情にも聞こえないかのようにカリの部分に軽く歯を立てた。ほんの僅かに、引っかけるだけの微かな刺激。
獲物をいたぶるネコ科動物のように、アンリエッタは少年の肉棒へと弱々しい刺激を与え続けた。
「……むぅ、ふぅあ……ん、チュッ♥　……まぁ、どうしてそのように物足りなさそうなお顔をしてらっしゃいますの？　……まさか、とは思いますけれど、サイト殿は……もしかしておチンポをもっと強く噛まれたいのですか？」

嘲るように、アンリエッタは少年を見上げた。
背筋がゾクリと震えるような視線に、今まで快感に打ち震えていたはずの少年の身体が別の何かを感じ取って震え出す。
女王の視線には市井を生きる民とは全く別種の、底冷えのするような怖ろしい鋭さがある事に少年は今さらのように気付かされていた。
「あっ……ああ、うぅ……っ」
完全な上位者の視線だった。
「……どうなさいましたの？　サイト殿、おチンポが少し柔らかくなってしまいましたわ……わたくしの胸とクチは、お気に召しませんでしたか？」
手を止め、静かにアンリエッタは問うた。
プルンプルンと首を横に振り、少年はまざまざとアンリエッタを見下ろした。見下ろしているのに精神的には遥か高くにいる彼女を見上げているようなものだ。
女王、なのだ。
自分達平民とは、何もかもが異なる……生きている次元さえ異なる相手。
そう気付かされる瞬間まで、彼はアンリエッタのことを壊れかけの女としてどこか侮ってさえいた。詳しい事情を聞かされたわけではないが、トリステイン救国の英雄としてその名が知れ渡りつつある才人の名を呼びながら自分達を貪る彼女を見ていればその狂気の源は容易に想像がつく。
英雄騎士サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ・ド・オルニエールと、女王アンリエッタ・ド・トリステインの間に果たしてどのような事があったのか、それとも何も無くただ女王が彼に対して一方的な恋情を注いでいるだけなのかは彼にはわからなかったけれど、もはや侮ることなど到底不可能だった。
怖ろしい。
アンリエッタが、女王という存在が、心底。
——と。
「……クスッ♥」
アンリエッタの瞳から、あの冷たい鋭利さが消えていた。
柔和な微笑をたたえ、国民がよく知る女王の貌で優しく肉棒への奉仕を再開する。
「少し意地悪が過ぎました。……許してください、サイト」
サイト、という響きが少年の鼓膜に深く、重く木霊した。
まだ畏怖は消えない。なのに、
「んっ♥　……はぁ……あっ……ふぅ……ンあぁあっ」
股間は、勢いを取り戻していた。
自分でもよくわからないうちに、少年はアンリエッタを怖ろしいと感じると同時にどうしようもなく惹かれていた事に気付かされた。
「あぁんっ♥　また、大きくなってまいりました……サイト殿のおチンポ……ん、ふぅはぁあ……チュッ♥」
溺れそうになる。
女王の肉に。あまりに淫らなその姿に、声に。
「うわぁあっ、ああああ」
乳圧が上がる。甘噛みされていた時の中途半端なもどかしさとは一線を画す強烈な快感に、少年は思わず腰を浮かせていた。
解き放ちたい。
尿道の根本で、大量の精液が噴火直前の火山のように憤ってい

るのがわかる。火口を吹き飛ばさんばかりの勢いで、爆発したい。アンリエッタの胸の中で絶頂を迎え、美しい胸を、顔を、汚らしい平民である自分の精液で染め上げたい。

その欲求は容易く怖れを超えた。

恐怖にも勝る官能の波が、迫り上がってくる。

「波打ってますわ、サイト殿のおチンポが波打っています、根本が膨れて、今にもザーメンが尿道を昇ってきそうなこの感覚が、ああっ♥　感じます、感じるのです胸に直接、精液の動きを感じてしまうぅぅぅッ♥」

「アンリエッタ様ッ、アンリエッタ様ぁああんぅあああああああああッ!!」

乳房の動きが加速していく。

上下に激しく揺すりながら、時に左右を交互に動かしつつアンリエッタは亀頭の先端から視線を逸らさない。

双乳が、これが本当に人間の身体の一部なのかと信じられないくらいにその形を変えていく。アンリエッタの両手が押し、間にある肉棒を扱きあげるたびに変幻自在と言う他無い動きで乳房は少年を呑み込んでいった。

「ああっ、わたくしも、わたくしも胸がっ、キモチ良くておかしくなってしまう……おかしくなってしまいますぅぅッ！　ひゃ、ひぁあああああっ♥　熱いのっ、火傷してしまうくらいにサイトのおチンポ熱いのぉおおッ♥」

髪を振り乱し、汗と涙の飛沫を飛ばしながらアンリエッタは獣のように叫んでいた。

事実、獣の交わりだ。

人間同士の理知的な意思の疎通など無い。乳房と肉棒、互いの肉と肉をただ擦り合わせるだけの、快楽を貪るためだけの行為。

愛なんて感情、所詮は幻想に過ぎないのだと諦観したくもなる程の圧倒的な快感に、全てが支配されていく。

「ふぁあああっ、あっ、んはぁあああっ♥」

まだ剥けかけの皮が胸に押し上げられて亀頭を隠し、かと思えばすぐに剥け……その繰り返しを見つめながらアンリエッタは唇を窄めてフゥーッと熱い吐息を亀頭へと吹きかけた。

「ひぐぅぅぅぅあああっ！」

ただの息。

蝋燭を吹き消すかのようなそれが、何とも喩えようの無い奇妙な感覚となって少年の股間から脳へと駆け上り、また一瞬で股間へとその返答が戻ってきた。

「ああっ、ヒグッ、ぼ、ぼくあああああアンリエッタさまもぉダメですぅぅぅあああッ!!」

脳の下した命令は至って簡単、単純にして明快なもの。

今現在少年とアンリエッタの双方が欲してやまない、ただ射精。

精液を吐き出し、全てを白く染め上げるそれだけの事。

「ああ、射精ますのね？　射精ますのねっ!?　女王のパイズリで、サイト殿のおチンポ汁がっ、たくさんの臭くて熱いおチンポ汁を射精してしまうのですねっ!?　あっ、あぁああっ♥」

「は、はいっ、はいいいいッ！　射精ますっ、アンリエッタさまのオッパイへぼくの精液ッ、卑しいぼくの精液がぁああっ！」

狂ったような激しい律動が、ついに崩れる。

尿道を白い奔流が駆け昇り亀頭の先端が爆ぜる瞬間を、アンリエッタは悦楽に弛みきった貌で見つめていた。

「イクッあっあぁあああああイきますアンリエッタさまのおっぱ

いでイクゥうううううぅうううッ!!」
精液のシャワーが、トリステインの女王の全身へ降り注ぐ。
「ああっ♥　……サイト、の……おチンポ汁が、こんなに……」
うっとりと白い飛沫を浴びながら、アンリエッタは掬い上げるように両の手の平をお椀型に合わせ肉棒の下に置いた。まだ噴き出し続けている精液がそこにねっとりと溜まり、一頻り見つめた後にアンリエッタはそれを啜り出した。
「じゅるる、んぢゅっ、ぢゅちゅーっ……ん、んぶ、ふぅう♥　んくっ、ぐ、ふぅ……ゴクッ……ンッ、……ふばぁ♥」
どれだけ飲んでも飽き足らない。もっと、もっと大量に飲み干したい。
……けれど、それは口からではなく――
「はぁンッ♥」
精液を啜っている間も、ずっと疼いていた。
哭いているのだ。肉棒が、精液が欲しくて、アンリエッタの膣内が哭いている。子宮が哭いている。ヒクヒクと痙攣し、蠢動しながらその足りない空虚な部分を埋めて貰いたくて、愛液は止め処なく溢れ続けていた。
「ふぅ……ンッ、……はぁ……サイ、トぉ……♥」
太股を擦り合わせながら、アンリエッタは可愛い才人達に視線を巡らせた。彼らもまたアンリエッタともっと深く繋がりたくて、我慢の限界を超えた顔は苦しげに歪んでいた。
「まぁ、……まぁ……フ、フフ……サイト殿ったら、こんな、物欲しそうなお顔で……わたくしを見てらっしゃるの、ね？　わたくしと繋がりたくて……ふぁあッ♥　……わたくしが、欲しくて欲しくてたまらないのね？」
子宮が下りる。自らの体内で子宮口がヒクつき、パクパクと貪欲な開閉を繰り返しているようアンリエッタは感じ取っていた。ソッと下腹に手を触れれば、思っていた以上にソコが熱くざわめいているのがわかる。
――才人に求められている――
それが幻影でも、錯覚でも、欺瞞でも、……アンリエッタは縋りたかった。この恋に、この愛に、縋って縋って……二度目の恋に報われ、救われたかった。
「……さぁ、サイト……ぉ♥」
才人のうち一人の手を引いて、アンリエッタは彼をベッドに横たわらせた。
彼にとって、平民として暮らしていた頃は想像もしなかったくらい柔らかいベッドの感触も、女王から見下ろされている今この現実からすれば些末なことで……皮は剥けきらないまでも雄々しく勃起した肉棒は天を衝かんばかりの勢いだった。
「結ばれましょう？　……わたくしと、サイト殿と……ドロドロに溶けるまで愛し合って……愛し、合って……っ」
スカートをたくし上げ、グチョグチョに濡れそぼった秘所を少年達の前にさらけ出しながらアンリエッタはそれだけで軽く達してしまっていた。
「は、はぁあぁ……ッ♥　……ふ、ふふぅ……ンッ、……もぉ、我慢など出来ませんわ……サイト殿も、でしょう？」
横たわった少年の上に、跨る。
ゆっくりと焦らすように腰を下ろしていく間、アンリエッタは軽い絶頂を何度も何度も繰り返していた。
この愛は、もはや妄執に近い。狂いかけの頭の片隅で、自分で

も理解かっているのだ。
けれど、わかっていながらも止められない想いが、ある。
それは死したウェールズのために全てを捨てようとしたあの時の激情にも似て……私怨のために、復讐のために自国を戦争に巻き込もうとした時の苛烈さにも似て――衝動は、アンリエッタを突き進ませ、暴走させた。
「……挿入れ……ますわ……、……サイ、ト……♥」
肉襞と亀頭とが触れ合う。
物欲しげにヒクつく淫肉は、剛直に吸い付くようにして咥え込み、アンリエッタがゆっくりと腰を下ろす間ももどかしげに蠢いていた。まるでそこだけが別種の生物のようだ。
「あっ♥　……はぁっ、……ン、ひぁああッ♥」
少しずつ、少しずつ剛直が膣内を深く昇ってくる。キツく締めつけられながらの侵攻によって自然と皮は剥かれ、ついに剥き出しとなった亀頭の感触を直に感じながらアンリエッタはフッと少年に微笑みかけた。
安心をもたらす、慈母のような微笑。
国を統べる女王たらんと、それはあまりに麗しく、気高い笑みであり――
なのに。
「――……あ、ハッ♥」
直後、その笑みが変貌していた。
慈愛に満ちた表情から一気に獣の、雌のソレへと。ただひたすら愛する男を欲し、倒錯した快楽に逃げ込もうとした業深い女の貌へと変じ、少年を怯ませ――同時に、今まで以上に興奮させた。
ズンッ、と。

「あっ、あぁああ、……あっ、かっ――――～～～ッ!?」
息が止まった。
突然のことに少年の意識は数瞬飛んでいた。そして、飛んでいた分が次の刹那唐突に戻ってくる。
大量の、射精とともに。
「いひぃいあぁあががぁあああああああああッッ!?」
「ンあぁあはぁああアアアンッ♥　お、おぉおおいひぃいいおほおおおおおおおッ♥」
何が起こったのか理解出来ない。理解出来ないのに、少年の腰はいつの間にか動き出していた。ズッポリと、アンリエッタの膣道の最奥まで入り込んだ剛直が、天井を衝く。
「ひはぁあああああああッ♥　おぼっ♥　ほひっ、あぁぁあああみゃひぃいいいいいッ♥」
汗と唾液を少年の身体に降らせながらアンリエッタは全身を激しく揺らし、喘ぎ狂った。少年の肉棒は射精しながらも激しくピストン運動を繰り返し、膣内を引っかき回している。もしかしたら自分が射精してしまったことをまだ完全に理解出来ていないのかも知れないなと推察し、アンリエッタは涎まみれの唇を妖艶に歪め、嬌声を吐いた。
「ふぉおおっいひぃいいアッ♥　ああっサイト！　サイトぉ！　サイトのおチンポッ♥　おチンポスゴいのっ、スゴいんですぅ♥　キてるっキてるズンズンッてキてるぅうぅひぁああああッ♥」
あの瞬間、アンリエッタは半ばまで肉棒が到達したのを感じ取ると、一息に最後まで腰を下ろしたのだ。
それまで焦らされながらゆっくりと膣内に呑み込まれていく最中だった少年は、突然の出来事に理解も反応も出来ず射精、そこ

から先はもはや本能に任せるまま腰を突き動かすだけの真実性獣へと成り果ててしまっていた。

けれど彼にとってもアンリエッタにとっても、それで良かったのかも知れない。

「ああ～～～っサイトッ、サイトォオオオ♥」

女王が求めているのはあくまで平賀才人。少年はその名前すら知られていない、代替品にも満たないような哀れな存在に過ぎないのだ。

けれど彼は、彼らはアンリエッタに対し複雑な感情を抱いてしまっている。彼らの殆どにとって彼女は初めての女性であり、トリステインの敬愛すべき女王であり、ただの情愛とは呼べない因果がそこには生まれてしまっていた。

だから彼女がサイトと叫ぶたびに、少年達は心を軋ませながらそれでも腰を振るのだ。それ故に今、獣となってアンリエッタを突き上げている少年は幸福なのかも知れなかった。

「サイトのおチンポぉ♥　わたくしの子宮にキスしてます、熱烈にキスされてますぅうンハァアア♥　もっと、もっとキスしてくださいキスしてわたくしの子宮口をこじ開けてぇえええっ♥」

望まれるままに、否、獣となった自身が望むままに少年はアンリエッタの膣内を激しく突き上げた。腰を鷲掴みにし、自らの上に固定しながら何度も、何度も子宮を突く。女王を、貫く。

「のおひぃいいいいイイッ!?」

夢か、現か。

歓喜の涙に潤んだ瞳でアンリエッタは才人を見ていた。名も知らぬ少年が、必死になって子宮に口付ける彼の姿が、女王には完全に才人に見えていた。

「サイトッああサイトぉおおおお♥　愛しておりますっ！　愛している、愛してるのぉおお♥　わたくし貴方をッ、愛して――ひぁあああはぁあああああッ♥　もっと、もっともっともっとぉおおお！　愛してっ貴方も愛してぇわたくしを愛してくださいサイトぉおおぉあああふぁあああああああああッッ♥」

親友の使い魔で想い人だとか、女王としての自分の立場だとか、余計な雑念などこの押し寄せる官能のうねりの前には全てがどうでもよくなっていく。

今は亡きウェールズの事も、頭から消えていた。

才人だけだった。

今、アンリエッタが心から欲し、求め、何もかも捨ててまで得ようと必死に藻掻いて手を伸ばしている先にいるのは、平賀才人だけだった。

それが、届いているのだ。

「ひみゃぁあああああっ♥　おぉおおっ、ひふっ、んふぅうぅぉおおおおお♥　サイトのチンポッ♥　おチンポわたくしの奥まで届いてるわたくしの全部サイトに貫かれてるオマンコキモチよすぎるのぉおっ♥　わたくし女王なのにトリステインの女王なのにこんなにふしだらなのイヤらしいエッチな女なのですぅううッ♥

でもサイトだけっサイト殿だけぇえ♥　わたくしのオマンコ犯していいのはサイトだけなの他の誰もダメなの誰も要らない国も民もどうでもイイィイイッ！　ああごめんなさいお父様お母様ルイズごめんなさいでもでも仕方ないのダメなのサイトだけいてくれればいいのぉおッあぁあああふぁあああアアアッ♥」

少年の薄い胸板に手を這わせ、爪を立て、アンリエッタは嬌態を演じ続けた。

愛しているのだ。どうしようもないくらい強く、才人を愛してしまっている。人はただ愛のためにここまで身勝手に、醜悪になれるのかと、けれどそのような理知も一瞬で消え去る。少年の、才人の肉棒が子宮口をこじ開け、そのナカに熱く迸る精液を注ぎ込んでくるのを感じていられれば、人の人たる理性など今のアンリエッタには不要なものだった。

「イクッ、イきますサイトに膣内射精(ナカダシ)されながらわたくしイッてしまいますぅうう♥　ですからくださいたくさんください女王マンコにチンポ汁たっぷりイイイイッ♥」

子宮が溢れるくらい、果てることなく少年はアンリエッタのナカに精液を注ぎ込み続けた。

このまま吸精され続ければ命に関わるかも知れないというのに止まらない。女王アンリエッタの膣襞は、少年を絡め取ったまま放さない。だから突く。全て尽き、枯れ果てるまで衝き続ける。

「ああっ、おおおおぁぁああサイトサイトおッ♥　ぬひぃいいいいいいいいッ!?」

身体の中身を直接ぶん殴られたかのような衝撃に、だらしなくアクメを晒してアンリエッタは絶頂した。唇の端からはダラダラと唾液が溢れ、目は白目を剥き全身が小刻みに痙攣している。その姿には一国の女王としての気品など欠片も感じられなかった。

愛欲に狂った一匹の雌がいるだけだ。

「あ、あぁあ……〜〜〜へ、はぁ……ッ♥　……サイ、トぉ……愛して、ますぅ……♥」

気を失いかけながら、それでも微かに腰を動かしつつ女王は愛を囁いた。少年の耳には届かない睦言を、甘く、淫靡に。

虚ろな目が宙を彷徨う。

アンリエッタの頬を、一筋の涙が伝っていた。

■■■

一度人としてのタガが完全に外れてしまえば、残るのは肉体とそこに宿る本能のみなのかも知れない。

「ふぁあああああっ♥　おおっ、おおおほぉおおお♥」

胸に挟んだ剛直を扱きあげながら、嬌声をあげて雌が身体を仰け反らせる。さらには左右から突き出された肉棒を両の手でそれぞれ扱き、下半身では前後の穴に同時に挿入され、全身を隈無く犯されている女が女王アンリエッタであると突然言われたなら果たしてどれだけの国民が信じるだろうか。

「ああああっ、シャイトのおヒンポ震えてりゅうぅうううっ♥　先ッポ膨りゃんで、射精(で)りゅの？　射精(で)るのですか？　おぉおおにゅほおぉおおおおッ♥　いひれふっ、どうりょ、いっぱいいっぱいヒンポじりゅ射精しへぇぇぇぇぇっ♥」

呂律が回っていないのと、口内にしこたま精液を溜め込んでいるせいでアンリエッタの言葉は滅茶苦茶だった。満足に聞き取ることも難しいそれを、少年達も少年達で誰一人まともに聞いてはいない。彼らにだってそんな余裕はなかった。

「あっ、あああアンリエッタ様ぁあああっ！」

「射精(だ)しますっ、アンリエッタ様もお顔にブッかけますぅう！」

「こ、こっちもマンコに膣内射精(ナカダシ)ッおっおおおおっ!?」

「ケツ穴ももう――ぎぃいいひぃいいあぁあああッ」

何人もの少年が同時に絶頂を迎え、アンリエッタの中と外と言わず精液をブチまける。これで何度目の射精なのか誰もわかりはしない。ただ求められるままに彼女を犯し、求めるままに彼女に射精し、終わることのない快楽に身を委ねているだけだ。

それは傍から見れば悲しく哀れな関係なのかも知れなかった。

しかしアンリエッタも少年達も、むしろ感じているのは幸福と充足だ。何故なら、互いに愛する者を抱いているのだから。

「ああっサイトッ♥　サイトぉおお♥」

「アンリエッタ様、ボ、ボクまたはぁああっ！」

才人に抱かれているという夢の中にいる限り、アンリエッタは至福の時を過ごし続けることが可能なのだ。対して少年達の方も美しい女王を犯し続けることが出来るのはやはり至福だった。

「いっぱい、いっぱいりゃのぉお……ん、はぁあッ♥　わらくひ、サイトのおひんぽで……いっぱい、しあわせなのれふ、わぁ♥」

悩ましげに睫毛を震わせ、アンリエッタは白濁にまみれながらも——むしろそのせいで彼女の麗しい美貌は妖しい輝きを放ち、誰からも愛される女王の魅力とはまるで異質な、雄を惑わす魔性を開花させていた。

「はぁ……アンリエッタ様……すごく、エッチで……、ああ……キレイ、だぁ」

「あは……ハァンッ♥　うれしい、ですわぁ……サイトが、わらくひを、キレイっへぇ……ん、ちゅぢゅ、ぷぁあっ♥」

しっとりと汗に濡れた肌が、退廃的な艶を放つ。昏い光沢は眼から脳を刺激し、そこから全身に回って最終的に股間へと辿り着くのだ。

アンリエッタそのものが一種の中毒作用を持っているとしか思えなかった。一度その味を覚えてしまえば、のめり込んで、もう離れられない。本物の才人がどうやって彼女の魅力に抗うことが出来たのか、少年達は不思議でならなかった。

——けれど、今となっては感謝もしている。

「あぁあああぉおおおおおっ♥　ヒィ、んぷっ、ふぁあああああぁッ♥　サイト、サイトぉおおおおおっ♥　わらくひの騎士い、愛していまひゅ、愛してりゅふぅうっ♥　んはぁあっ♥　にゅふ、のほぉおおおおおッッ♥」

本物を手に入れることが出来なかったからこそ、今のこのアンリエッタがあるのだ。だから少年達はサイトに感謝していた。

女王の身体中を犯しながら、耳元で彼女の名を囁く。

「アンリエッタ様ぁ♥」

「ああっ、アンリエッタ様っ」

途端、返ってくるのは巧みな指と舌使い、膣と尻穴の強烈な締めつけだ。情念たっぷりの視線とともに。

「はいっサイトぉお♥　もっと、いっぱいきもひよくなりまひょうね？　わらくひと、サイトと……ンふ、あはぁあっ♥」

その眼は真っ直ぐに、ひたすら真っ直ぐに愛しい人の姿を捉えている。疑いもなく、純粋に。

「愛していまふぅ、……あぁ、サイト……ぉ♥」

アンリエッタは、今、ようやく手に入れた幸せを全身全霊で噛み締めていた。

～END～

奥付

誌名 ……『乳精娼姦』

発行元 ……黒色彗星帝国＆寒天示現流

発行責任者 ……忌呪／寒天

印刷所 ……同人誌印刷くりえい社様

サークルURL ……黒色彗星帝国
（http://imiju.jp/）
……寒天示現流
（http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/）

発行日 …… 2009/10/25

あとがき

どうもはじめての方ははじめまして、
そうでない方はいつもありがとうございます。
今回はゼロの使い魔本、合同誌ということで、
おっぱいエルフを好きなだけ書いて見ました。
というか春のコミ１で出す予定だったんですが、
実に半年後ですね。いやぁ、なんともはや。
シエスタなんかも描いてみたかったのですが、
それはまたサイトなりなんなりの方法で描きたいと思います。
頑張ってもっとクオリティ上げていきたいなぁ。
そんな感じでここまで読んで下さりどうもありがとうございました。

寒天

エルフ耳とか大好きです。
ロイヤルなビッチも大好きです。
そして何より、オッパイが好きです。
オッパイの大きいエルフと女王とか最高じゃないか。 忌

成人向
黑色彗星帝国
寒天示現流